

大台ヶ原の伝承

○一本たたら

大台ヶ原には様々な伝説があるが、最も有名なものに、「一本たたら」にまつわる話がある。環境省吉野熊野国立公園管理事務所「大台ヶ原の自然解説マニュアル」によると、その粗筋は、以下のようなものである。

牛石ヶ原には、牛が寝そべっているような形をした「牛石」があるが、この石は、慶長11（1606）年に、大台ヶ原で修行を行っていた丹誠上人が、法力によって多くの妖怪変化を閉じ込めた石であるといわれる。しかし、一本たたらだけは、1年に1度だけ、「果ての二十日」（12月20日）に自由に出てくることを許された。以来、「果ての二十日に伯母峰を越すな、越せば一本たたらに生き血を吸われる」と里人に恐れられるようになった。

この妖怪を退治しようとしたのが、天ヶ瀬村の鉄砲の名人、射場兵庫頭という人である。兵庫頭は名犬ブチを連れて、果ての二十日に伯母峰に出かけたが、一本たたらは手強く、なかなか仕留めることができなかった。しかし、お守り袋にいれていた「神仏祈願の魔除けの弾」の力で、ようやく退治することができた。

その後、何ヶ月かたったある日のこと、湯の峰温泉（今の田辺市本宮町）に、身の丈八尺（約2.4m）もある修験者が湯治にやって来た。その修験者こそが、大台ヶ原で兵庫頭に退治された一本たたらであった。一本たたらは、「猪笹王」という背中に笹をはやした大きな猪の仮身であった。その正体を盗み見てしまった宿屋の主人は、危うく殺されそうになったが、射場兵庫頭の鉄砲と名犬ブチを買い求めてくることを条件に生命だけは助けてもらえることになった。しかし、宿屋の主人は鉄砲とブチを大事に守るように、事の一部始終を村人たちに話したため、一本たたらに殺されてしまった。その後も一本たたらは、亡霊となって「果ての二十日」に伯母峰のあたりに出没し、旅人を悩ましたという。

○義経の笹馬

源義経が、兄頼朝に追われて吉野に入った「吉野落ち」の話はよく知られているが、義経が、大台ヶ原の山中に分け入ったという伝説があり、それにまつわるいくつかの話が伝えられている。その一つに、義経が大台ヶ原で乗り捨てた馬が、「笹馬」と呼ばれる妖怪となって生き残っているというものがある。

岡本勇治「世界乃名山大台ヶ原山」所収の池田晋「大台ヶ原山と大台行者」によると、笹馬は小山のように大きく、背中には竹が生え、苔むしており、山中を進む姿は、竹藪が動いているようであったという。また、正木ヶ原には、「片腹鯛の池」の伝説があり、義経が鯛の片身だけを食べて、残りを捨てたものが、池の中に住んでいるという。これは、このあたりの地形が、西がやや高く、東に傾いて平坦なところから、「片原平」と呼ばれており、そこから「片腹鯛」に結び付けられたのではないかとされている。